特60
376

092458-000-4

特60-376

護国女太平記

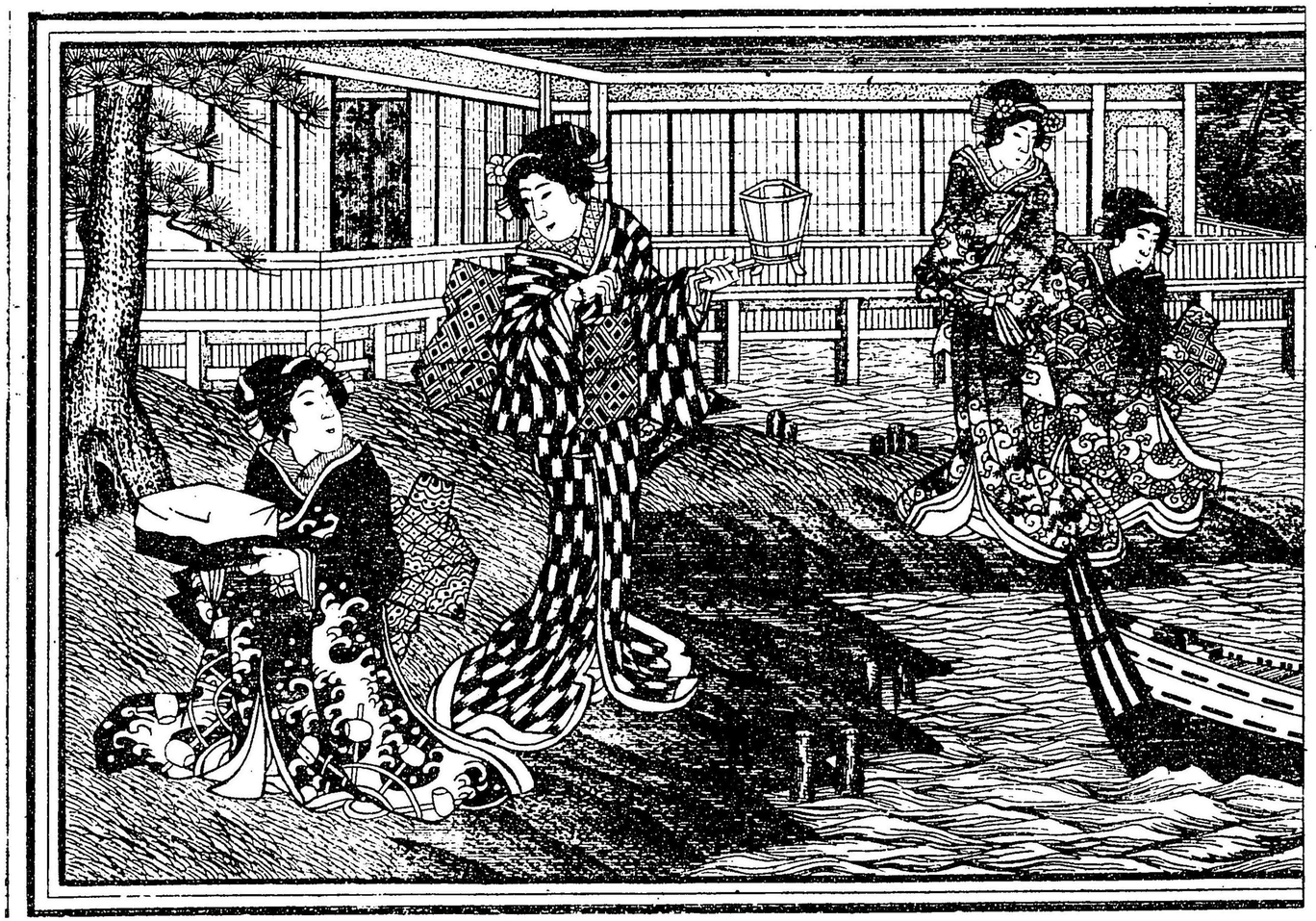
梅堂　国政／画

M20

DBP-2096

特60
376

柳沢出羽守
綱吉公を
招待し終日
饗應を



枯木の春
さくら
ふ砂や
ゆくへの雲を
むとりんそ
牡丹ばりなく
蝶ぞ花
柳原の室
御題を給
り詩歌を
吟ズ

四代将軍
家綱公の
御舎弟ゝ
府宰相
綱重卿ハ
淫酒ゝ耽り乱酒短慮ゆゑ近臣を
手討ゝあるゝこと度々なり忠
臣根津卯右エ門ハ死を決して諫め
しゝ君忽ち憤り一刀ゝ討捨給ひ
しゝ霊魂御側を去ず毎夜の
御目先ゝ顕れゝゝ大ひゝ
御悔悟あそばされ卯右エ門の
忠臣まで御改心あり後故あり

卯右エ門

〈考る故君の御相を伺せゝゝゝ
正敷天下の御主とゝゝせ給ふ
と申上さゝり。

て御生涯後遊ゝり
其次ハ館林宰相綱
吉卿ゝ生得仁義
の道を重ゝ
学文ゝ
御心
を移
さゝを給ひる
御附ゝ牧野
備後守と云あ
り日京都
智積院隠
高坊下向〈

綱重卿

百姓伝ゝく柳沢弥
太郎と云ゝり隠高坊を殺家
来ゝ計面し暫く逗留中語ゝ
の御人相のことを吐しりゝふ次エ

ツギ
弥太郎ハ兼而立身を心がけ
居さも故是より牧野へ
入殿を願意うしゝが
元より聡明
随高坊
年古能牧野も
其才を感し
遂ハ綱吉
公の御近
習役ハ
召出さる
望のごとく御前へ
出げるハ人気をとる
詩哥をどゝ折ハん
備後守
殊ハ御意ハ叶ひて君寵生
倍学文ハのゝ御心移り鬼角
御陰九ゝ大奥入りを稱

ゝ御心もとを
ゝを盗ハぬ昼夜仕給五
常の道を講しる多ハ
故御母堂桂日院様
ハ御是様をとゝめ
御附の人々も御懇
綱吉卿
杯出て
何ゝ御
ゝもさし
ゝを御公の御
次工

綱吉卿
ツヾキ
一日柳
牧野相
識し御酒
宴の折柳
沢へ御盃を
雅子の
御方へ
長く添け
れば水の
外御意
叶はぬ
世を流
太郎へ
御殿
の物と
下され

差上御有り
私下指住ん
と舞出た
次の間
あり謡
を色
彌太郎
其後は折々
御所望あり
御母堂も兼て御案にあり
し処此程の御様子彌太郎
が才智を申上げれば甚
ご御感有て彌太郎
が宿許へ品々拝領
物あり彌太郎夫婦
へ得さうと本庄次郎
左エ門方へ罷越此
度桂昌院様
宿許へ拝領物
次エ

次第仕因て愚妻を御局迄御礼に差上度何分にも御狂成をと頼に付本庄承知し翌日妻に花やに粧ひ最見ごと成花籠に造り花を挿さるを持参し御廣

東海道五十三次庭造之圖

敷へ出しに御目見被仰付きめへ容顔美麗なれと秀才なり御前へ伺公しいとをしやに平伏して造り花を献上する機関仕掛なれ自然と御前へ走り行故別て御気に入られ御懇の御詞を蒙り度々出よとて黄金を

次第

綱吉公

彌太郎

綱吉公
彌太郎
ソヽキ
駒り
足より度々
出仕しなを
ロのん給ふ君御
感あり何者の作

出せてとんところ
なもひ夫の意と悟り
或日
自作
の詩
哥と
御ら
んふへし
これの
筆ふゆやと御
尋ふ弥太郎の妻ろくと申
上しふ婦人ふい色弥太郎
のいさせるくんと仰ふ局
幸ひ今日主り居りの御
なくきこみ御好
こあそばさ
れこればんもろ
り可申と申上しふ
呼と
の御意ふかさめとかロされく
題と下されふまい思案次エ
其秀りろろ
手跡と云見ごとろく
御母堂こんと八ム御らんふロ

四ノ内の体
其風情
実ふ美るり
偵女嫌
ひの君も
憎くらぞ
思召さめ
いさ〳〵と
認め差
上しふ
御ん
わろ
扱々
おさえん

女あへ
珍〳〵と
御賞
美あ
りて
御配
綱吉公
るぞ
仰付
られ
おさめ
い局
と兵
○おさめ
帰宅
し夫ふ
今日の
首尾
ぞ咄
喜び
られ
京都

次平 美女を召抱へ養女とし御母堂へ差上て君の御側へ出ビ元ゥ
柳沢夫婦の仕込を御心と慰めるお竟ふ御寐間の御伽をひらそう

御龍愛除り
色是より柳沢
お五百石御御領
仰付らる糸女の程なく
懐妊と御里子御誕生
あり綱松君と号
る御座様御
子なれ故柳沢
申上大奥へ進
ぜられ御本腹
と披露し御悦
ひ深し弥太郎
糸女の進め 次工

綱吉公
将軍家御相撲
代将軍と仰ぎ
まろ〻此時柳沢
き名聞り御側役仰
付られ出羽守と任官
なりけり是より昼夜
御側を離ず何事も
御相談あり威勢い
ちじるくつて然ども表い
慎て謙遜して勤ゆるの

御屋
御奥へも毎々
御泊りあるべ
御屋敷も弥太郎
米女のとりの故と
柳沢
綱吉公
柳沢出世
進物品の
御側用
人仰付ら
れ神田橋
内へ屋敷
下る
其威飛鳥
六日四代将軍御他界因て
次ア

訪ふるんど
身をひそめ
假ふて
無礼の
体
忠
実と
表と

綱吉公

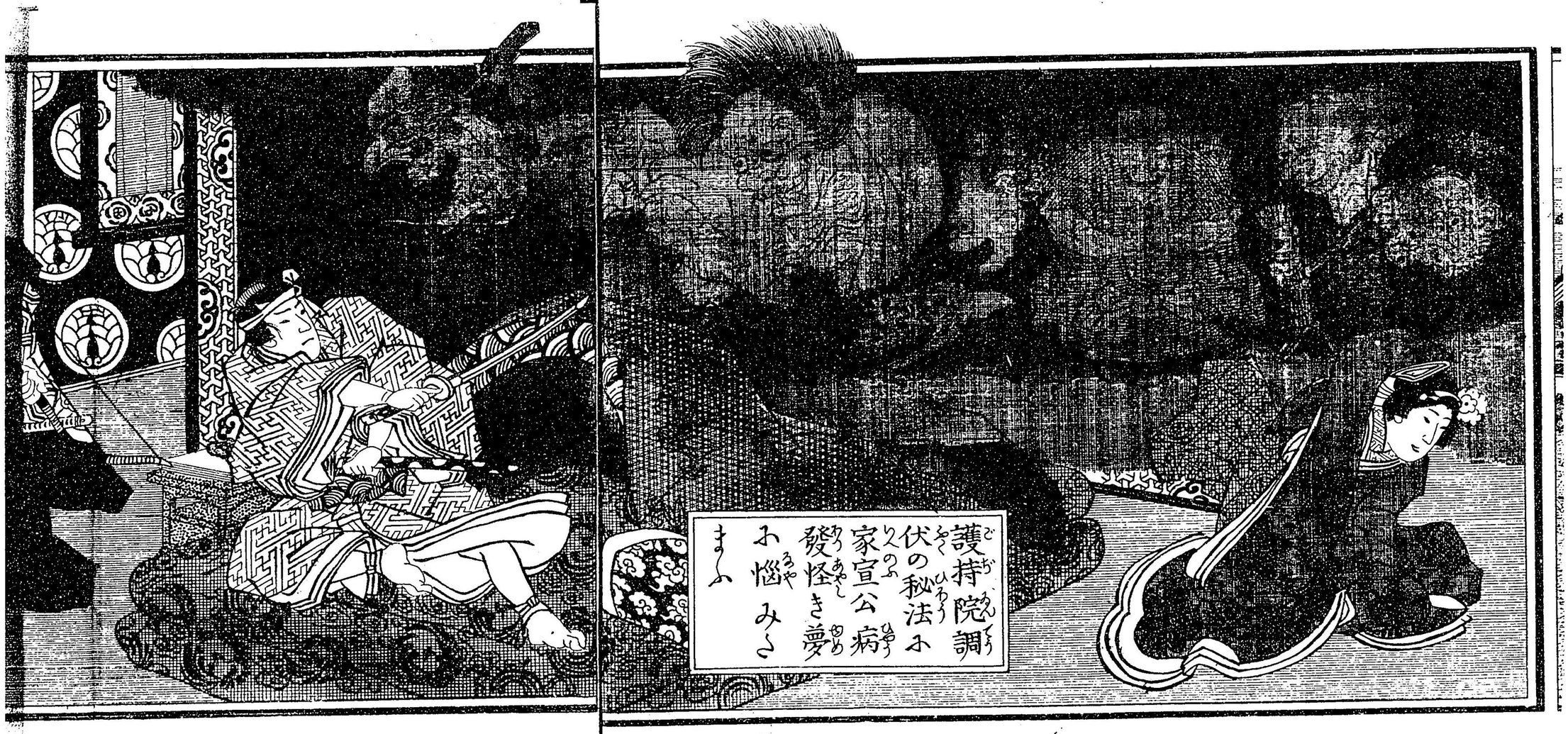
けるの人諸人感賞しける。菜京
都くり随高坊来り牧野
備後守對面し御悦を述べ
牧野い僧を止め置て後言上
たける。ふ将軍ふも先言相違なきと△

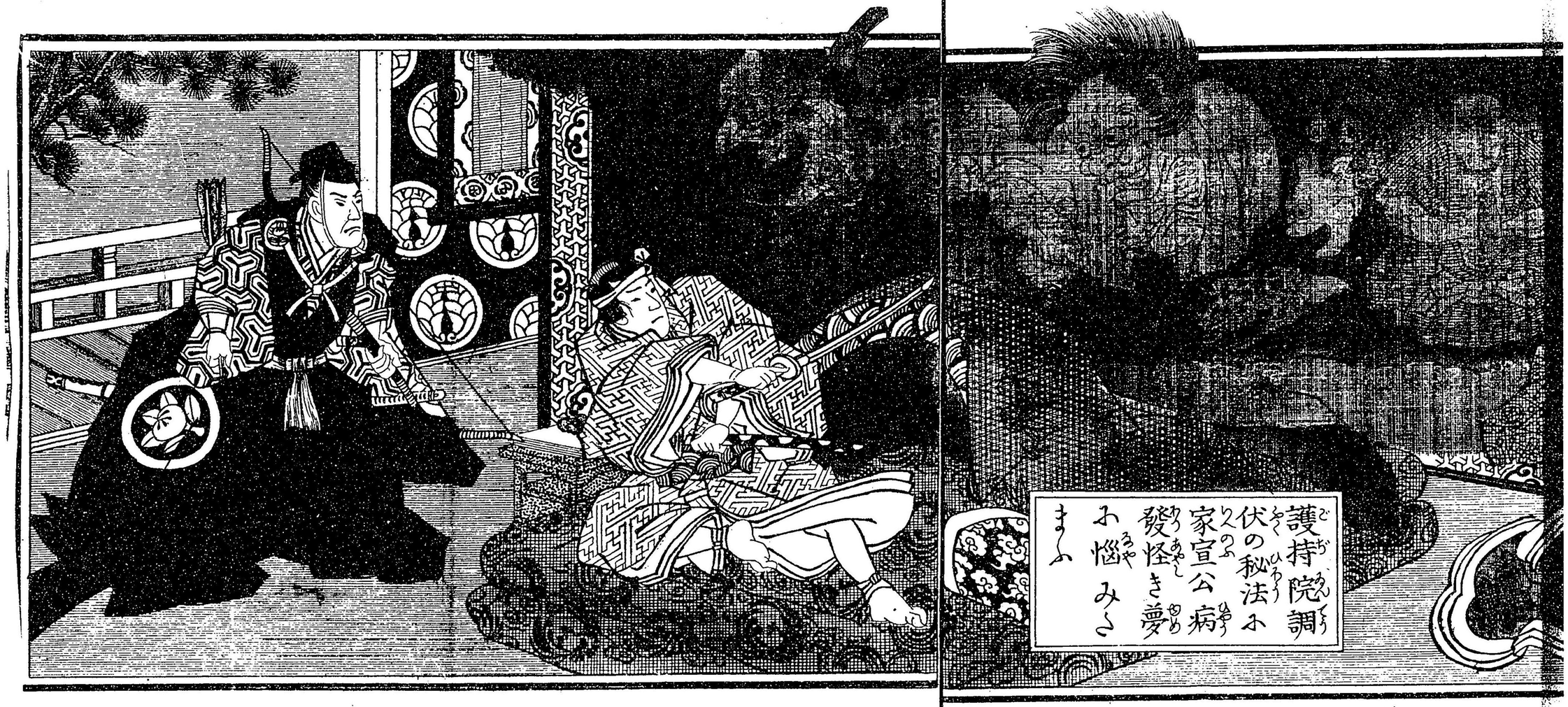
△御信仰あるて
神田橋外ふ地面を
清め一宇御
祈願所と建
られ護持院
大僧正と
改め寺
領千石を
下さる
○

英蝶浅妻舟之圖

おさめ

○出羽守ハ
よさ荷擔人と悦ひ度々参詣し
種く談じけんとる妻の兄とハ知ものの
更ふ思ひ扱御基所ふハ比程姫君
御誕生在しく國姫様と稱し奉る
御成長の上紀州殿の御簾中と
成せらる御産御用と相勤るるろ
き御基様くり御願ふるろく二万
石御加増三万三千石ふ成是くり柳
沢ハ格式の大名ふ縁をむすんと美
目よれ女と三人まで養ひそれくへ
縁付くり茲ふ御令嗣徳松君


護持院調伏の秘法ホ
家宣公病發怪き夢ホ
悩みさまふ


護持院調伏の秘法ゝ
家宣公病
發怪き夢
ゝ悩みゝ
まゝ

次に 御逝去
續て采女
も病死し
ける公方ハ
御寵愛の
采女を放
れ御心替り
又々書籍の
み御覽あ
るに御崖
様くり美
女を五人迫
撰こ差上

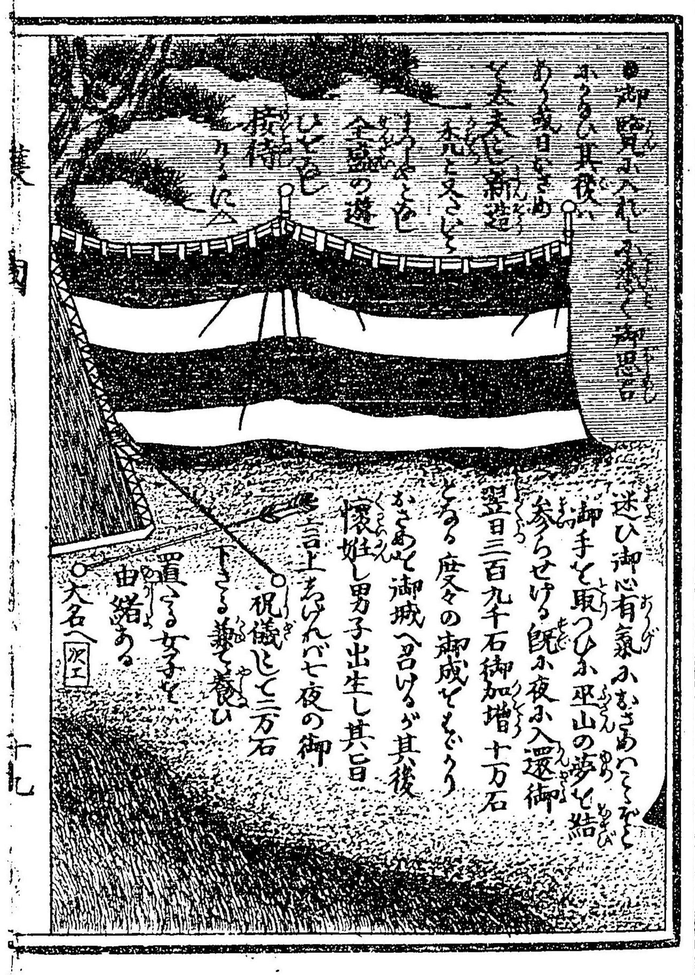
給其御心
移さ兎角
一途を偏ら
せ給へバ諸
侯の面々心
配し何卒
御心慰ん
と評議ゑ
るふ井伊掃
部頭申ける
を大小名の
内能を達し
こゝろのを召し

次に

其藝を御覽ぜんと云ふこれ富竟
夫々へ通じ用意し御母堂へ申上ル
護持院

綱豊公
過半柳原ゞ手に落こう出羽守に
舞子藝子の内を容色勝れ者と
七八人抱置直或時申上げく御銀意の

大名へ御成ときゝあしか
らんと除ける福部頭
なりと雖ども
後柳人の
なりける
其後
加増
とる此時此首
さる婦人の輝と
其上もさめ
愛敬類なく不図御


御覽に入れ
ふるひ其後
ある幾日もさめ
て太夫に新造
一夫と又さと色
全盛の遊
ひと色
接待
迷ひ御心有氣ふむさめいてゝなと
御手を取つひに巫山の夢を結
参らせける既に夜に入還御
翌日三百九千石御加増十万石
とある度々の御成をもてなり
かさあて御城へ呂けるゞ其後
懷妊し男子出生し其旨
言上ちげんべ七夜の御
祝儀として二万石
下さる兼て養い
置くる女子を
由緒ある
大名へ次上

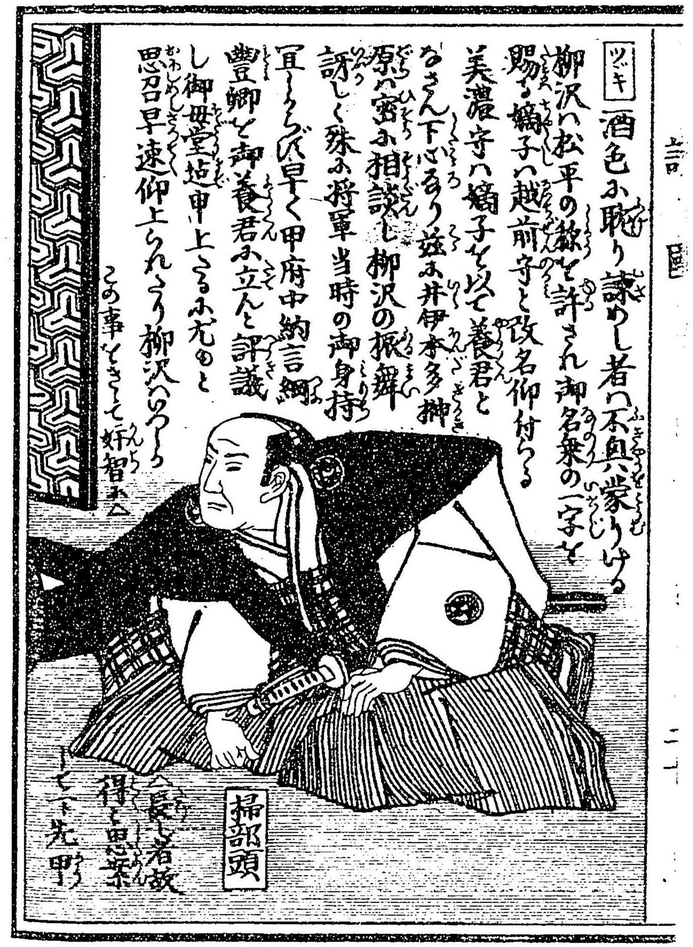
ツヽキ 縁組
臣なる
出羽守ハ
此上ハ大
老職ふ
なうん
と工夫
しなる
ゲしふ
三万石御加
増大老職
仰付らる
美濃守と

〈こゝ故犬の
ことあて市中へ
武敬の令
あり諸民難儀
しけり益ふなくて
云女子と柳沢の
まうり差上ゲ

改め其後子息
十五才の時伊
勢守と
任官しなる
おきえふ二男三男
ありしが妾腹と申
上置さり此二人も
壱万石宛賜りさり
護持院僧正も度〻
召され御酒宴の列ふ
列り殺生禁制
別て戌の御年故
犬と大切ふと申上〈

天性美貌
殊ふ発明
あり御寵
愛下方
なるまで
今い以前
ふ代りて
御心乱れ
御政道
ふ方事
美濃守
出仕と更ふ訴と聞

給式番衆 次工


ツヾキ
酒色ふ耽り諫めし者ハ不具蒙りげる
柳沢ハ松平の称を許さん御名乗の一字を
賜る嫡子ハ越前守と改名仰付らる
美濃守ハ嫡子をもて養君と
なさん下さるゝ茲ふ井伊掃部頭
原ハ密ふ相談し柳沢の振舞
詳しく殊ふ将軍当時の御身持
耳〳〵ゝ早く甲府中納言綱
豊卿を御養君ふ立んと評議
し御母堂迄申上さるふ尤もと
思召早速仰上らんゝ柳沢ハ
この事ときて好智ふ
掃部頭
長七者故
得と思案
しもの先甲

舟なと養君とし
其上事をきえ
と此事を先立
て言上あげる
ふ御母堂ゝ
も仰あり又早
速御聞届あり
四の丸を御普請
あり御用捗りハ
柳沢仰付られ地
御屋敷
清ノ御祈
禱等ハ護
持院相勤めゝ

掃部守

御普請出来上り甲府公西の丸へ御入城あり

従二位大納言家宣公と名乗せ給ふ柳沢八

坪井善吾

後君も定め上へと謀計を巧し

かさぬうり越前守へ将軍の御子

なくら御養君ともなれまと種々弁舌を

以て勧きければ将軍ゐも竟ゐ迷はされ

我も思ふことあり急ゐ成ぐ(ど)先其証を取せ置

んと甲斐信濃ゐて百万石との御墨附下されこり

△西の丸様ハ将軍を譲り越前守を御養子ハなさ
んと願ひ給ふ将軍ハ汝
の願必ず叶へて
つゝがなと
の御意
なり
将軍
ある日御
臺所へ此
ことを御
相談あ
り老中

ゾッキ 茲ハ
柳沢の掃部
頭をなき者ハせんと
増上寺へ参
御菖
拜の折金吾と云者
を以て討んとせが事
なりしを金吾ハ其場ハ
死を家宣公ハ
御病發物ハ狂ハせ
給ふゆゑ最ハ審なり

御病症なり御附間部越前
守ハ又ゝ思慮し御
造営の際護持院の
祈禱のあやまりなどありと心附
御寐所の床下を改むるハ正
しく調伏の秘法なることを
取捨らるゝゆゑ漸次ハ御全
快ハなりゝ柳沢ハ失望色夫婦
種々工夫をなすも叶ハ
なさめが情ハ迷ひ美濃守を召甲
府へ國替申付金紋先箱虎の皮
鞍覆を許し今ゝ家門同様の格式ハて
勤めよと上意あり美濃守ハ又ゝおさめがりハ

宝暦十日
ハ被露
をなるの
吐しハ大
ひなるゝ
きなひ天下の
一大事と御諫
言ハ其不良
気ハ其坐を
立さるゝ御屋
所ハ御心
配あそばされ掃
部頭密ハ

次工

ツヾキ 御相談あるべき
既お室
永六年

家宣公

正月十日に成将軍あい弥々明日
い仰出さるんこと
今日は
御基様
入らせらる御酒宮を
と催され教盃を傾け
らるゝ御心ど決し天下の大事と
強て諫めゝ更ふ御聞入なし天下

の為捨ろ色と竟ふ将軍教して其場を
御自害あるべきこと之を因て天下平
穏なり実ふ賢女と謂し奉る

掃部頭

御急病と披露し家宣公を六代将
軍と仰奉る因て井伊掃部頭を
大老仰付られ間部越前守は調伏
と見顕はせふゝ御側用人仰付られ
柳沢美濃守は御役御免百万石御
墨附并遺式御取上隠居閉門仰付られ
御基様御遺言も有之に付嫡子甲斐守へ
家督相違なく十五万石下さる護
持院僧正は追放となる諸人安堵
となる全く御基様の賢女故なり

御届明治二十年五月廿七日

編輯兼出版人 尾関卜ヨ
日本橋区若松町十五番地